HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Boats Against the Current : A Philosophy of Time in F. Scott Fitzgerald's Works [an abstract of entire text]
Author(s)	松浦, 和宏
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13410号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74466
Type	doctoral thesis
File Information	Kazuhiro_Matsuura_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文の要約

学位論文題名
Boats Against the Current:
A Philosophy of Time in F. Scott Fitzgerald's Works
(流れる時間を取り戻すために: F. Scott Fitzgerald作品における時間論)

松浦　和宏

本論の目的は、F. Scott Fitzgeraldの作品中に描かれている「過去」の主題に着目し、この作家独自の時間論を明らかにすることである。Fitzgeraldの作品にとって、「過去」や「時間」は見慣れた主題だと言える。当然ながら、この主題に沿った先行研究も数多く存在している。その多くは、懐古主義的なFitzgeraldの眼差しが作品中に投影されていると指摘する。実際に、彼の作品と「過去」の主題は切っても切り離せない関係にある。例えば、彼の代表作である*The Great Gatsby*の主人公Jay Gatsbyの目的は"repeat the past"であるし、Fitzgerald自身もこの主題を多くの作中で執着的に繰り返し描いている。そのような作品には、回復不可能な存在が伴われている。失われたものや、それを執拗に回復しようとする登場人物からは、作者が抱える強迫観念のようなものを感じざるを得ない。

それでは、Fitzgeraldが抱えていた(過去にまつわる)問題とは何か。伝記的研究の助けを借りれば、その問題は彼の幼少時代に経験した喪失体験が起因していると分かる。彼が生まれる前に亡くなった2人の姉たちの存在が、彼の人生に大きな影響を与えていたのだ。その影響とは、死者をどう扱うかと言う問題から生じていた。彼は死者を弔う責任を母親から引き継ぎ、それを履行する必要に迫られていた。しかし、Fitzgeraldは弔う対象となる存在を知らない。その重責から、彼は喪われたものを求めざるを得ない。この「喪の不可能性」(Mitchell Breitwieser)が彼に過去を希求させ続けることになった。このように、作家の過去に横たわり続ける死者(たち)の存在によって、彼の作品に死者や喪われたものが同伴する理由も自ずと解明され、Fitzgeraldが追い求める過去が単なる懐古主義的なものではないことが明らかになる。では、脆弱な過去を機能させると同時に現前化させる「時間」とはいったいどのようなものか。そして、それは私たちの時間とどのように異なるのか。

この問題を考察するため、本論ではFitzgeraldの長編と短編を交錯させた。これらの作品には、強い関連性があることを作者自身も仄めかしている。そして実際に、死者や過去に見失った存在が繰り返し描かれている。既に従来の批評でも作品間の相関性は指摘されている。しかしながら、これらの指摘は登場人物の共通点などの表層的な部分でしかなく、作者の中に潜んでいる深層的な問題を捉えているとは言えない。そ

こで、本論では各々の作品を個別的に論じるのではなく、敢えて混じり合わせることで、短編作品を長編作品読解のための鍵として活用した。そして、作家が抱えていた原題的な問題をより深く追求することを目指した。作家の深層心理を掘り下げて理解するために、伝記的情報を積極的に活用した。また、Sigmund Freudの理論も援用している。

そのような読みを通して本論が焦点を合わせるのは、作家が追い求めた独自の「時間」だ。作者特有の複雑な事情により、独特の時間感覚に基づいて作家が作品を創作していたと本論は指摘する。本論のようにFitzgerald独自の「時間」に着目する研究は、これまで見られなかった。また、この「時間」は、私たちが認識している時間とは異なる。例えば、Henri Bergsonは『物質と記憶』の中で、過去とは記憶の中で既に物質化されたものだと指摘している。すなわち、私たちが認識した「何か」(それが形を有していなくても)は、認識の中で物質的な「もの」として私たちの記憶の底に沈着する。その過去の記憶を基底にして、私たちの現在が未来に向かって進展していく、という。これを言い換えるならば、物質的なものに変換された過去を確立することで、現在と未来がはじめて存立することになる。しかしながら、Fitzgeraldの描く時間の過去は、時間的発展を支える強固な土台とはなり得ず、極めて弱く傷つきやすく流動的な存在だ。そして、その弱々しい支柱によって支えられている措定的な未来も、常に崩壊の危機にさらされている。これは、彼が弔うべき過去の存在を失ってしまっていることと密接に関係している。過去という片翼を失った以上、それを回復せずには未来の構築は望めない。それ故に、その過去と未来の回復を目指し、常に過去と現在の二点間往復を繰り返すこととなる。それでは、その時間がどのように描かれているのかについては、以下各章の詳細に委ねたい。

第 1 章　Fitzgerald and the Dead

第 1 章では、短編“Babylon Revisited”と“The Curious Case of Benjamin Button”を考察した。Fitzgeraldの主要短編作品と評価されている両作だが、作中の「死者」と「罪」に着目することで、作品が抱える新たな主題が浮かび上がってくる。両短編作品の考察を通して、主題上の鍵を見つけ、第3章の長編読解に接続する。ちなみに、“Babylon”では語り手と亡くなった妻の関係が物語を駆動している。語り手は、(間接的に)妻を殺した罪を背負っている。その死者、すなわち過去との和解なくして、語り手の未来は担保されない。しかし、突如として侵入してきた過去の存在によって、死者との和解は失敗に終わる。それと同時に語り手は過去の精算も達成できない。語り手の過去再構築の試みは無残にも頓挫し、時を同じくして未来の礎となる娘をも失う。

もう一方の作品“Benjamin”では、主人公が老人として生まれ、歳を重ねるごとに若返っていく。不可逆的であるはずの時間を、彼は逆流していく。その中で、彼は父親の否定(Freudの言うところの父親殺し)の罪に問われていく。殺人—すなわち死者と

大きな罪がここで同時に発生する。過去に突き刺さる大きな問題を解決できないことで、彼の過去は否定され、未来への橋頭堡を失ってしまう。その結果、過去への回帰が強制的に繰り返されていく。このように、「過去」「死者」をもとに作品を読めば、「失われた過去」が重要な主題であるとわかる。それを基軸にして両作品を考察することで、作品の奥深くを「喪の不可能性」が貫いているとわかる。この章によって、Fitzgerald作品、特に短編においても死者の存在と時間の主題が密接に連携していることが確認される。

第2章　Fitzgerald and Wandering in the Past

第2章では、短編“Winter Dreams”と長編*The Great Gatsby*を合わせて議論する。また、引き続き“Babylon Revisited”と“The Curious Case of Benjamin Button”も考察する。Fitzgeraldはいくつかの短編小説を「長編に従属するもの」として描いたと言及している。しかし、それ以上の具体的な言及はない。その中でも、“Winter”と*The Great Gatsby*の関係性については、具体的に指摘している。それは、“Winter”をGatsbyの「前触れ」として描いたと言うものである。であるならば、この2つの作品を同時に論じることで、作家の主題的な問題を探求できるはずである。それと合わせて、“Babylon”と“Benjamin”の考察も行った。これらの作品に登場する問題は、Fitzgerald自身の問題とも相似的である。すなわち、過去の問題の影響に永続的に晒され続け、オブセッション的に同じことを繰り返し続けてしまう人物が描かれている。このように、作品内の登場人物と作家に共通する心理的問題点を指摘することで、作家を作品と接続した。

第３章　Fitzgerald and His Theory of Time

第3章では、第１章と2章の短編作品の考察で得た鍵を用いて*The Great Gatsby*に組み込まれている時間の主題を追究する。作中の鍵穴は2つ。Gatsbyが述べた“repeat the past”と語り手Nickの根底を形成する考えである“reserving all judgements”だ。これまでの章で述べたように、Fitzgeraldの短編作品には、過去を喪失もしくは過去の出来事によるオブセッションを抱える登場人物が数多く描かれる。彼らが過去を繰り返そうとするのは、喪失した過去を復元するためだ。それは、「喪の不可能性」の解消のために他ならない。しかし、前述した通り、過去を失ったままの状態では未来は到来しそうにもない。そこで、“reserving all judgements”が重要なスキームとなる。Nickが述べているように、この方法は“infinite hope”、すなわち「未来」を生み出し続ける。Gatsbyも全てをreserveすることで欠けている過去を「宙吊り」状態にし、未来への暫定的な橋頭堡を手に入れていた。これこそが、欠損した過去を補い、未来へと羽ばたくためにGatsbyが用いる「時間」だった。だがしかし、暫定的な橋によって稼げる時間は限られている。Gatsbyがこの「宙吊り」スキームを継続できなくなった時、彼に

浮力を供給し続けてきた“infinite hope”は破綻する。それと同時に、彼の時間も止まる。彼を支えてきたものが倒壊してしまった以上、彼の人生も物語も不可抗力的に終焉を迎えたのだった。